

2020  
第6回

# これからの建築士賞

「建築士」は日本の都市と建築にかかわる重要な職能資格であり、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注者など幅広い業務に携わりながら、未来につながる社会の実現のため努力してきました。近年では防災、環境、高齢化と人口減少、歴史文化の喪失など多くの課題の中で、その専門的な知見を生かしながら、魅力的な社会、街並み、建築空間の実現を目指して活動しています。

なかでも最近では他の建築関係の会とも連携し、それぞれの地域をベースにした協働も盛んになってきており、これらの新たな活動が大きな波となって地域社会の未来に力となる事も期待されています。多様な分野における建築士ならではの新しい動きに光を当て、顕彰し、支援するとともに広く世の中に伝えようとするのが「これからの建築士賞」の目的です。

## 募集要項

### 1. 賞の対象

都市と建築に関わる近年の活動や業績で、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注など建築士としての多様な立場を通じて行った未来につながる社会貢献に対して、その活動・業績を担った建築士もしくはそのグループを顕彰する。未来につながる社会貢献とは、たとえば、美しい景観の形成、安全で魅力的なまちづくりや空間の提案、自然環境や歴史的環境の保全、地球温暖化・人口減少・高齢化社会に対する提案、弱者に対する対策、文化・にぎわい・コミュニティの創出、建築に関する啓蒙・普及など多様であるが、さらに、これからの建築士の仕事を開拓するような、従来の建築士の枠を拡げる活動の応募も大いに期待したい。

### 2. 名称及び受賞数

これからの建築士賞 10点程度（但し、応募点数による）

### 3. 応募資格

原則として建築士もしくは建築士を含むグループで、活動のベースが首都圏にあること。過去の応募者の再応募は可とします。審査員が直接係った案件は応募対象から除外される。また審査員が所属する事務所、グループが審査対象となる場合は、その案件に係る一切の審査から外れるものとする。

### 4. 応募方法

別紙候補推薦書に記入の上、必要に応じて参考資料をA4用紙3枚以内にまとめて、事務局まで提出のこと。関係資料は返却されないものとする。郵送、メールによるデータの送付も可能。候補推薦書は東京建築士会ホームページからダウンロード可能。自薦、他薦を問わない。

## 審査結果

入賞6点(応募点数22点)

1	業績名 超軽量ダンボール天井材の協同開発	候補者名 森 信義	4	業績名 富士見台トンネル	候補者名 能作 淳平
2	業績名 モクタンカン	候補者名 株式会社アラキ+ササキアーキテツ 荒木 源希、佐々木 高之、佐々木 珠穂	5	業績名 建築の終わり方から設計を始める	候補者名 山路哲生建築設計事務所 山路 哲生
3	業績名 自給自足の豊かさづくりのお手伝い	候補者名 濱本 真之+千代田 彩華+オンデザインパートナーズ	6	業績名 再生建築から考える設計事務所の新しい在り方	候補者名 神本 豊秋+再生建築研究所

### 5. 審査員

藤江 和子 (藤江和子アトリエ)  
藤村 龍至 (東京藝術大学美術学部建築科准教授/RFA)  
吉里 裕也 (SPEAC/R不動産 代表)  
吉村 靖孝 (早稲田大学教授/吉村靖孝建築設計事務所)

### 6. 審査・顕彰

3月上旬 公告  
4月24日 応募書類提出締切  
5月中旬 審査会  
6月10日 東京建築士会総会の席上で顕彰

### 7. 発表・その他

受賞者の活動資料を上記総会時に配布します(活動資料はA4版、受賞者が作成するが、場合によっては推薦者が協力する)  
受賞者及びその活動資料については本会誌、ホームページに講評とともに掲載するほか、各メディアに公表予定。

### 8. 応募締切

2020年4月24日(金)必着  
事務局窓口へ直接お申込みいただく場合は、4月24日(金)17:00迄とする。

### 9. 応募書類提出先・お問合せ先

一般社団法人 東京建築士会「これからの建築士賞」係  
〒103-0006 東京都中央区日本橋富沢町11-1 富沢町111ビル5階  
TEL:03-3527-3100 FAX:03-3527-3101  
E-Mail: event02@tokyokenchikushikai.or.jp  
<https://www.tokyokenchikushikai.or.jp/>

## 関連情報：話題の書籍

### これからの建築士 一職能を拓ける 17の取り組み

建築への信頼が問われる今、変わるべきは100万人の<建築士>の職能だ！

第1回これからの建築士賞審査結果を紹介した『これからの建築士一職能を拓ける 17の取り組み』(編著：倉方俊輔、吉良森子、中村勉 協力：東京建築士会)が出版されました。この賞の内容が詳しく掲載されています。

全国の書店・ネット書店で販売

本体価格 2,300円 + 税  
発行：学芸出版社

<http://www.gakugei-pub.jp/>



# 総評文

審査会は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策としてオンラインで行った。

## 藤江 和子 (藤江和子アトリエ)

昨年に続き2回目の審査でしたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言発令と外出自粛の状況下で、選考審査はオンライン審査となりました。

新型コロナウイルス感染拡大は、地理的空間的概念を超えてパンデミックが起きて、世界のどの医療現場でも、建築空間的環境整備の対応において、建築士の職能が活かされるべき事態がいたるところで明らかになっています。また、「三密」を避け「ソーシャルディスタンス」を確保する生活が叫ばれ、これまでの建築的思考とは真逆の生活行動スタイルを推奨されているのです。建築の公共性のあり方が変わらなければならないのでしょうか。人間が生きる環境の保全に深く関わる建築士という職能の新たな責務や可能性について向き合わざるを得ない事に改めて思考を深めなければならないでしょう。

応募作品には長年の地道な活動成果が、地域や町の再生や賑わい活性化に成果を挙げているものや、母子家庭の生活環境を確保する社会サポートとしての活動など、既に広く知られているものもありました。こうした行政や地域、街、住民という複雑な仕組みの中での建築士ならではの職能発揮が明確にわかりにくく「賞」に推せなかったのは残念です。一方で畳の保存伝承や超軽量化天井材の開発など、建築士ならではの具体的な問題提起と開発という地道な活動は、更なる継続と展開を応援したいと思います。

入賞された6つの活動は、現代社会が求める職能をよく示していて、従来のハードな建築士のイメージを、爽やかに軽やかにしかも柔軟に対応しながら成長していく新しいスタイル、現代的な流れの生きた活動と言え、これからの建築士賞にふさわしいものでした。



### 藤江 和子 (ふじえ かずこ)

家具デザイナー／富山県生まれ／1977年フジエアトリエ主宰。1987年株式会社藤江和子アトリエ設立代表取締役／現在 多摩美術大学客員教授。2000年～東京建築士会事業委員／主な作品 ヒルサイドテラス、奈義町現代美術館、奈義町立図書館、リアス・アーク美術館、ぎふメディアコスモス、台中国家歌劇院など／建築家とのコラボレーションをとおして、建築と人と家具の新しい関係を提案。空間と生活者をつなぐ家具デザインにより、心地よい環境を追求しています。

## 藤村 龍至 (東京藝術大学美術学部建築科准教授／RFA)

COVID-19が猛威を振るうなか、目の前にある空間ストックに目を向け、徹底的に「使う」というポジティブかつ戦略的な姿勢が目立ち、共感を持って審査させていただいた。「これからの」というタイトルに相応しい現代的な切り口のものが多いが、特に面的な広がりのあるもの、継続的な取り組みに発展しそうなものには強く共感した。

1990年代後半、「せんだいメディアテーク」の建設時に伊東豊雄さんが現場の関係者同士でメールが行き交っている様子を指して「まるで竣工前からこの建築が『使われて』いるようだ」と表現されていた。当時、建築の可能性が物理空間から情報空間へ拡張しようとしていたのだが、あれから25年経って、建築の拡張が提案されている先は、都市に漂う空地や、解体と着工のあいだなどの残余空間などが目立つようになった。

COVID-19による緊急事態のなかで物理空間での移動を自粛する経験を共有した私たちは、再び建築を情報空間へ拡張を図るようになるかも知れない。提案のなかには素早く新たな取り組みを実践し、将来の方向性を示そうとするものもあった。これからの「これからの建築士賞」の行方は再び大きく方向転換しそうである。



### 藤村 龍至 (ふじむら りゅうじ)

建築家／1976年東京生まれ／2008年東京工業大学大学院博士課程単位取得退学。2005年よりRFA(旧・藤村龍至建築設計事務所)主宰。

photo: Kenshu Shintsubo

2010年より東洋大学専任講師。2016年より東京藝術大学准教授。2017年よりアーバンデザインセンター大宮(UDCO)副センター長、鳩山町コミュニティ・マルシェ総合ディレクター／主な建築作品に「すばる保育園」(2018)。主な著書に『ちのかたち』(2018)。

## 吉里 裕也 (SPEAC/R不動産代表)

今回、応募された提案は、建築士としての関われるモノ・コトの幅の広さ、その可能性を感じられる提案が多かった。特に印象的だったのは、建築をつくる前後の「仕組み」や「運営」といった関わり方まで踏み込んだ提案だ。

クライアントに言われたとおりの建築をつくり、つくったら終わり、ということではなく「なぜそこに建築が必要か?」「本当に役に立つ建築のあり方とは?」「クライアントにとっての価値とは?」と真摯にそれらの課題に向き合っていた結果、領域を超えて力を発揮しているのだと感じた。

それが可能なのは、複雑な与件を満たしつつ一つのカタチに結実させるという建築士のスキルが、とても役に立っているように思う。見た目の良さだけでなく、コストや構造・設備だけでもなく、それらを高い次元で空間に内包し、絶妙なバランスを見つけながら建築というカタチに落としこむ。それは、建築士の職能の根幹のように思う。

もうひとつ重要なスキルがプレゼンテーションだ。特に受賞者は、ダイアグラムやドローイングといった、プレゼンテーションの上手さが際立っていた。

高度成長期のオリンピックが開催されたころ、建築家が都市のビジョンを語ったように、変化が激しく先の読みにくい昨今、あらためてビジョンが求められているタイミングだと思う。

「暮らしのビジョン」を描き妄想をカタチにすること、それがこれからの建築士に求められていると思う。



### 吉里 裕也(よしざと ひろや)

株式会社スピーク代表取締役、R不動産株式会社代表取締役/2003年に「東京R不動産」、2004年にSPEACを立ち上げるとともに、CIA Inc./The Brand Architect Groupにて都市施設やリテールショップのブランディングを行う/建築・不動産の開発・再生のプロデュースや建築デザイン、「東京R不動産」「leallocal」「公共R不動産」等グループサイトの統括ディレクション、地域再生のプランニング等

を行っている/共編著書に「東京R不動産」「だから、僕らはこの働き方を選んだ」「toolbox」「2025年の建築「七つの予言」」等。

## 吉村 靖孝 (早稲田大学教授/吉村靖孝建築設計事務所)

美(=aesthetics)と倫理(=ethics)のあいだの葛藤はさまざまな創作分野に共通するが、アートの世界ではソーシャリー・エンゲイジド・アートが話題であるし、デザインの世界でもソーシャルなデザインの評価が高まっていて、近年は建築士も倫理の番人であることが強く求められるようになった。「これからの建築士」賞は、そのような時代の要請を的確に捉え、倫理的成果を積極的に顕彰してきた。一方で私は、募集開始前、活動の新規性が先行して作品が置き去りに成るのではないかと懸念を表明した。いくら職域を拡張したとしても、aestheticsとethicsの高度な融合がなければ、結局は建築士という職能の価値をやせ細らせる。そういった流れには加担したくないというのが正直な気持ちであった。しかし、骨太な入賞作品を前にして、私の懸念は完全に杞憂だったと確信した。aestheticsとethicsの関係をアップデートしていくためのさまざまな方法が示され、「これからの建築士」というビッグタイトルに違わぬ意欲的な活動が集まったように思う。入賞者のみなさんに改めて感謝と賛辞を贈りたい。



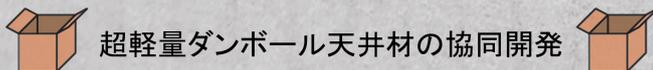
### 吉村 靖孝(よしむら やすたか)

早稲田大学教授、博士(建築学)/1972年愛知県豊田市生まれ/1995年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1997年同大学院修了。1999年~2001年文化庁派遣芸術家研修員としてNVRDV勤務。2013年明治大学特任教授。2018年早稲田大学教授(現職)/主な作品に「フクマスベース」、窓の家、中川政七商店新社屋など。主な著書に「ビヘイ

ヴィアとプロトコル]、「超合法建築図鑑」など。

1

超軽量段ボール天井材の協同開発



## 超軽量ダンボール天井材の協同開発

株式会社日商インターライフ  
森 信義山田ダンボール株式会社  
及川 裕肇 佐藤 菜津子

## なぜ開発に取り組んだか

日商インターライフは内装会社です。

開発のきっかけは東日本大震災の時に発生した天井落下事故。建築、内装業界に携わるものとして内装材の天井落下での事故は心苦しく、どうにかできないかと悩んだ。また、地震の影響の他に経年劣化、漏水による脆弱化脱落による天井落下事故の事例を知った。そこで天井落下を完全に防止することを目指すのではなく、落下しても事故につながらない、怪我への危険性を限りなく低くするために超軽量材の開発に取り組んだ。



## 開発趣旨

- 1) 地震や劣化・脱落によって天井落下は発生するものと考え、もし天井落下が発生しても人命を守る仕組みを考える。
- 2) 人材不足や、職人の高齢化において作業員の負担の軽減を目指し、部材の軽量化、工法・工程の簡略化を図る。
- 3) フローの時代から、リニューアル等ストックの時代に適応するために、既に構築されたものをできる限り利用する。
- 4) 既にある技術を生かして、メーカーとの協同開発にて低価格で提供できるよう、新たな材料を開発する。



## 材料の構成と特徴

リサイクル材料であるダンボールとアルミ箔の三層構成

1) 寸法・重量

厚さ: 4.0mm

幅: 600~1,200mm

長さ: 600~2,400mmにて調節可能

重量: m<sup>2</sup>あたりの重量0.84kg(石膏ボードの約1/10)

2) 防火性

「準不燃材料」認定取得済

3) 透湿性

アルミ箔によって透湿抵抗が大きく、湿気による重量の増加がないため、劣化・脱落が殆ど無い

透湿抵抗:  $500 \times 10^{-3} (\text{m}^2 \cdot \text{s} \cdot \text{Pa} / \text{ng})$  (石膏ボードの約1,000倍)

4) 吸音性

化粧石膏ボードとほぼ同程度 NRC吸音率: 0.08 (残響室法)



断面モデル



## 施工特性

1) 在来工法

専門的な技術は必要なく、在来の石膏ボードの施工技術があれば十分対応できる。

2) デザインの自由性

「突きつけ」「目透かし」「塩ビジョイナー」等の張り方ができ、仕上げも塗装・クロス貼等選別ができる。

3) 既存軽鉄下地材の利用

仕上げ・ボードの撤去後に残る既存軽鉄下地材の再利用が可能である。(資源の効率的利用)

4) 超軽量材料であるため、比較的に天井への取り付け、搬入・搬出が容易にできる。

5) 貼り付けの際のカッター等による材料切断時に発生する粉塵は少ない。

6) 軽量下地材の落下防止について、ワイヤーメカと連携して、より安心・安全な天井工法を目指している。

## 施工写真



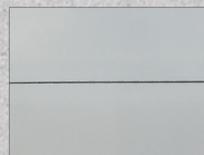
実物断面



カッターナイフにてカット

通常工具にて軽天下地に  
に取り付け

天井張り(910×2,430×4)



目透かし張り塗装仕上げ

「超軽量段ボール天井材の協同開発」は、建築士の活躍の原点に、生活空間を安全に快適に整えるという責務があり、その職能を発揮した成果といえる。

東日本大震災では想定外のような被害を体験し、なかでも天井材の落下被害は、震源地から遠く離れた土地でも多く発生し、安全であるべき建築空間が危険な害を与えるものになってしまった。「超軽量化天井」は、建築士であり日常に内装施工を手がける現場からの発想である。高所天井面での施工は技術と体力を要し、職人不足の昨今は、

大きな課題となっている。そこで、石膏ボードに替わる軽量天井材の開発に取り組み、リサイクルの先駆である段ボールを基盤にしてアルミシートを組み合わせた不燃材としての建材開発である。天井以外での利用可能性はあるのだろうか、使用例など採用を促す魅力のアピール不足が残念である。建材開発は、試行を繰り返しながらの意外と時間も労力もかかるものである。

この賞をきっかけに広く建築士らとの交流が生まれ、この材料の更なる可能性の展開が実現できることを期待する。

藤江 和子

業績名:

## モクタンカン

候補者:

株式会社アラキ+ササキアーキテツ  
荒木 源希・佐々木 高之・佐々木 珠穂

アラキ+ササキアーキテツ

モクタンカンは、とある団地の住戸リノベーションにおける低コスト・可変性・素材感を兼ね備えた収納や家具として、2014年に考案したものである。鉄管とクランプを用いた仮設架構単管システムの、規格クランプはそのままに、鉄管を48.6φの木に置き換えた。非常にシンプルな転用に展開可能性を感じ「モクタンカン」の商標登録を行った。さらに、アトリエ系建築設計事務所として意匠設計監理を主な業務としながらもアーリーマジョリティをターゲットにデザインの裾野を広げたいと考え、2018年には仕入れから生産管理まで自らで手掛けるモクタンカン株式会社を立ち上げ、本格的な企画販売及びレンタルの事業展開を始めた。

現在、モクタンカンは拡張性に優れた温かみのある場づくりの素材として、屋外イベントブース・展示会ブース・アパレルVMD・広場活用など、幅広い分野で活用されている。また、比較的組立て作業が容易であることから、DIYツールや参加型イベントのツールとしても利用されている。素材となる48.6φの木単管には、北海道下川町のトドマツを中心に、宮城県南三陸町のスギ、愛知県岡崎市のヒノキを用いてきた。オリジナルカラーク

ランプは、広島県福山市で粉体塗装を施している。リノベーションにおける断片的なアイデアが、日本の森から新たな循環を生み出し地域社会を活性化するビジネスとなった。

デザインによる社会貢献において、ハイエンドの探究だけではなく、実社会の中心を担うマジョリティへの価値提供が重要であることは言うまでもない。旧来のアトリエ系建築設計事務所のうち極一部の成功例を除いたその多くは、収支実態を顧みず探究のみに注力していたために、社会の常識からかけ離れた非人道的な組織となっていた。働き方改革が叫ばれる成熟した現代日本社会において、また、人類が未曾有の危機に直面している2020年において、バランス感覚を欠いた旧来のアトリエ系建築設計事務所のような組織は生き残ることができないだろう。有能な若い人材によるハイエンドの探究を継続するためにも、同時にマジョリティ志向のデザイン提供の側面を持つことが、これからのアトリエ系建築設計事務所のあるべき姿のひとつではないだろうか。

モクタンカンは、その実践である。



既製仮設架構単管システムの規格をハックし、かたく重かった鉄管をやわらかく軽い木製丸棒に置き換えて製品化した。その製品をモクタンカンと呼んで、販売やレンタルを行う事業まで立ち上げた。設計事務所の経営戦略としても興味深いのが、素材の置き換えという最小限の操作で、エンドユーザーの空間への参加可能性をこれまでとはまったく別の次元まで拡張したこと

を評価したい。既製品の集合体と化した昨今の建築を逆照射しながらその限界を軽やかに乗り越えてゆくその手付きは鮮やかというほかない。

吉村 靖孝

3

自給自足の豊かさづくりのお手伝い

自給自足の豊かさづくりのお手伝い

濱本 真之 + 千代田彩華  
+ オンデザインパートナーズ



**クライアントとまちの成長をデザインする**

私たちはクライアントに対して先導したり、並走したりするのではなく、むしろ、そのようなクライアントの要望に応えるようクライアントをバックアップするような追走する設計手法を行った。設計過程においてクライアントのクリエイティブ力と主体性がボトムアップされ、建築家の手が離れた後も自身で活動を行えるまでに成長する。1人の創作活動がまちの創作活動となり、まち全体に豊かさ広がっていく。

**主体性の成長ストーリー**

継承困難な空き家を地域住民と施工 DIY を行うことでクライアントの成長をデザインする

築年数の長い空き家をクライアントを中心とした地域住民参加型のDIY教室を計画。DIY教室にはプロの職人を呼び、実際の施工手順を教わりながらDIYを進めて行くことで施工DIYを行うと同時に、クライアントと地域住民のDIYスキルのボトムアップを行った。ここでは、クライアントを中心に参加型DIYを行うことで、コストを抑えた空家活用の実証実験をモデルとして取り組み、活用事業のハードルを下げる試みを実験した。

<b>種まき期</b> 空き家の価値に気づいてもらえるよう地域の人に声をかけ、仲間集めを行う	<b>育てる期</b> クライアント自身がDIYを学ぶ事で、自身で生活を豊かにする力を身につける	<b>芽が出る期</b> お店がオープンされた後も、クライアント自身の手によって建物が更新されていく
---	---	---

工事中の風景に地域住民の参加できる余白をつくることでまちの成長をデザインする

開発によって生じる工事期間を活用し、工事風景に地域住民の参加できる余白をつくることによって開発期間の遊休地にフォーカスした時間のデザインと仮囲いだけになるエッジを広域的にひろく場をデザイン。地域住民が、新しくできるこの場所も自分たちの街の自分たちの場所として活動できるように、新しく住む人々を地域の住民が受け入れ、コミュニティをつくりだすための住民のバックアップを行なって、建物ができる前から始まる時間と空間の設計を行なった。

<b>種まき期</b> 幅広い分野で地域とコミットした活動をおこない、取り組みの趣旨を伝えることで、この場所を知ってもらう	<b>育てる期</b> 地域住民の「はじめてみたいこと」を実施するためのサポートを行うことで、吉日菜校をまちを自分ごと化し、主体性を形成する	<b>芽が出る期</b> まちの一人ひとりが、スキルや興味をもち寄り、自身の関わりたいところで関わる	<b>花咲く期</b> 開発後一から関係性づくりが始まるのではなく、完成した時から住民が住民を受け入れていく
--	---	---	---

これからの建築士はクライアントに対しリードせず、伴走するのではなく、「追走する」という姿勢が打ち出されている。工事期間中の敷地の仮囲いの内側の一部を積極的に開放し活かす提案は、遊休不動産だけでなく遊休状態に着目するもので、社会経済活動への負のインパクトも大きい工事現場の空間ですらも使い方を変えていけば正のインパクトに変え、まちを育てる場所にする

こともできるという提案である。建築物を竣工前から「使う」発想とともに、そのことによってまちを育てるというポジティブな姿勢によって、建築の可能性を拡張している点が高く評価された。

藤村 龍至

# シェア商店 富士見台トンネル

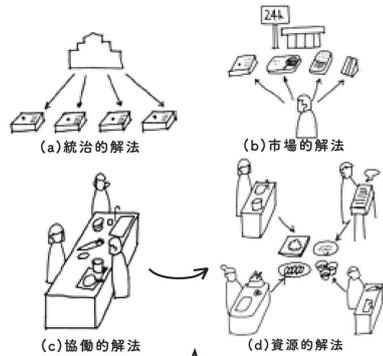
## 概要

東京都国立市、ベッドタウンである富士見台団地の商店街に副業をテーマにしたシェア商店〈富士見台トンネル〉。働くことがテーマの場所のためデスクを中央につくり、その周囲にキッチンや本棚やスクリーンなどを配置することで、デスクのみではなく工夫次第で、キッチンや客席のテーブルや製作用の作業台としても使うことができる。キッチン部分は会員制のシェアスペースで、会員は自らの屋号で出店することができる。出店者は週に1日だけ商売をしたい主婦や本業の延長で実験的に出店しているお店もあれば、本業とは別の商売をしているお店もあり、どの商店も個性的だ。

### ① 個性を表出させるガバナンス

食を通したガバナンスという観点で、(a)統制的解法、(b)市場的解法、(c)協働的解法、(d)資源的解法という4つに分類してみる。

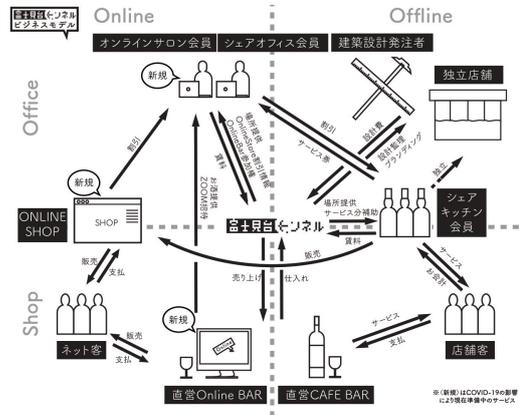
(a)統制的解法は、例えば学校給食や炊き出しのボランティアなどがこれにあたる。安価で全体に行き渡すが、画一的なシステムがゆえに多様性を持たせるなど、クオリティを求めることが難しい。例えばアレルギーのある子にはサービスが提供できない場合もある。そして2つめの(b)市場的解法は、サービスの向上のために市場原理に基づき、多様な商品をつくりだす方法。例えば給食費をなくし学校の隣にコンビニを建てるので、そこで好きなお弁当が買ってくださいというもの。バラエティー豊かな商品の提供が可能になるが、これも高度に市場原理に従うゆえに、売れないものは淘汰され、コモディティ化がおこり、最終的には均質なサービスになってしまう。そして3つめの(c)協働的解法はシェアリングエコノミー的なアプローチ。持ち寄りパーティーや物々交換など、ラストワンマイルを自分たちでやることで好きなものを好きな量だけをつくることができ、経済原理に縛られず、多様性をうむ。しかしこれは物理的に人が集めしシェアすることで可能になる。最後の(d)資源的解法はCOVID-19の影響により人を中心としたクリエイションから資源を中心とクリエイションへ移行をイメージしている。人が集まって1つのキッチンや設備をつくるのではなく、それぞれがつくったモノやスキルを持ち寄る。富士見台トンネルは現在〈協働的解法〉から〈資源的解法〉へ移行準備中だ。



COVID-19により富士見台トンネルの運営方針移行中

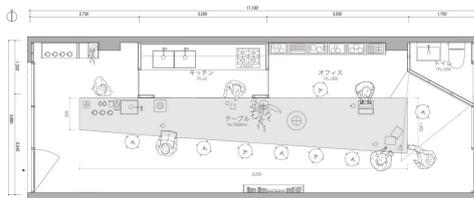
### ② 複数の立場をつくる

富士見台トンネルには、運営をしているノウサクアーキテクト、 coworkingスペースの会員、シェア商店で出店をしている会員、そしてお客さんがいる。さまざまな立場を同居させることでモノや金銭の交流が生まれる。例えば、coworkingスペースの会員はシェア商店から割引でサービスを受けられる。出店者は最初からお客さんがいる状態で商売を始めることができ、coworkingの会員は、例えば取引先の接待にしようすることもできる。



### ③ 大きなデスク

素材は特殊モルタルの人研ぎ仕上げとし、オフィスとしても飲食店のカウンターとしても使えるように平滑でありながら肌触りが良い。カウンターには〈コンセント〉や〈炉〉が組み込まれているため、オフィスのPC用やカフェのための置き照明に使用できる。



### ④ サードプレイズとサロン

〈富士見台トンネル〉は会員がキッチンを使用して出店する日替わりの商店だ。それゆえに気軽に入れる馴染みのお店というわけではない。不特定多数の人を対象としたサードプレイズというよりは、あるテーマに沿ったこだわりが表出する。出店ごとに店主たちの個性が出て、ある意味ではサロンのような場所になる。一方でファサードは全面ガラス張りになっている。サロンのような閉鎖性は一見分からない。しかしながら、入口のドアはめ殺しの開口と同じく大きなガラス戸のため、少し緊張感を感じる。公開された場でありながら、参加するにはそれなりに能動的に行動する必要がある開放されたサロンをイメージしている。



郊外の住宅団地の一角に事務所を移転し、職住を近接させた上で事務所の空間に「トンネル」と名前を付け、空間の余剰を利用してシェアオフィス、日替わり出店のカフェなど多くの使い方を重ねる。そこでセミナーなども開くという。設計事務所の空間は多重に意味づけされ、収益も重ねられている。単なる個人的な実践というよりは、COVID-19でオフィスの意味が問われるなかで

前向きに設計事務所の空間そのものを積極的に「使う」提案であり、都心部に集中する建築設計事務所を思い切って郊外住宅地へ移転すれば地域の活性化と設計事務所の働き方改革が両立しうることも提案しており、射程の長さが高く評価された。

藤村 龍至

5

建築の終わり方から設計を始める

# 建築の終わり方から設計を始める

山路哲生建築設計事務所 山路哲生



銀座・外堀通り沿いにある7階建てのオフィスビルを建替えるにあたり、テナントが退出し解体するまでの約半年間、既存建物を1棟丸ごと街に開放し、有効活用する「CANBIRTH」(キャンバス)というイベントを実施した。普段は入ることのできなかった歴史ある建物の最期を、以前のオーナーや街の方々を楽しみながら記憶に残してもらいつつ、新しい建物やそのオーナーが地域と繋がることができればと考えた。

## 1. CANBIRTHとは

オフィスビルを「キャンバス」にしたアートイベントであり、この場所を利用することによって、新しい「可能性(CAN)」を「生み出す(BIRTH)」挑戦者を応援することを目的としたプロジェクトである。オーナーとしてはローンチに向けての大きな広告効果、また地域への貢献を通じたコミュニティ形成が可能であるとともに、建築士としては以下の4つの可能性を実現する方法として位置づけている。

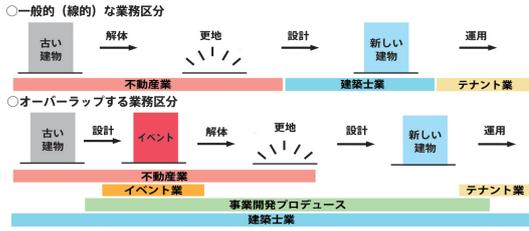
### (1) 街の記憶の継承と地域の活性化



既存建物である銀座高木ビル(旧有製写真館ビル)は1966年に計画され、34階層の有製写真館は「大倉喜七郎」「マツカーサー婦人」等、戦後の著名人を撮影してきた歴史がある。

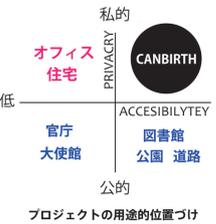
20年に一度行われる伊勢神宮の式年遷宮や、上棟時にご近所の方々に対して餅やお菓子を振舞う「むねあげ」といった「更新イベント」を通じて日本では人々に街の記憶を紡いできた歴史がある。そんな「時間的なコンテクスト」を繋ぐ日本的な文化を、現代都市の新築や建替え計画においても見出したいと考えた。

### (2) 職能領域のオーバーラップによる接点の増大



更地からの設計ではなく、既存の建物をいかに終わらせていか、を設計の始まりと捉えた。長いスパンで建物に関わることで、さまざまな職種の方々や時間や業務区分を共有し、各業種間の接点を増大させることで、プロジェクトベースの協働機会をつくり、建築士としての職能の幅を押し広げるとともに、キャッシュポイントを拡張している。

### (3) 賃貸不動産条件に外れた未利用都市ストックの公共化



近代化された都市では私的領域と公的領域が合理的に分断されてしまったがゆえに、緩衝領域がなくなってしまった。前近代においては、私的領域の中に他人がふらりと立ち入ることが可能な領域が確かにあった。それが土間や縁側であり、古代ギリシアにおけるアンドロニティスだったのだろう。未利用地を利用して、民間の私的領域の中に短期的にでも、そのような公共性を帯びた場所をつくりえないだろうか。未利用地を流動化することで、街の血液を流し、健全なアクセシビリティをつくりたい。

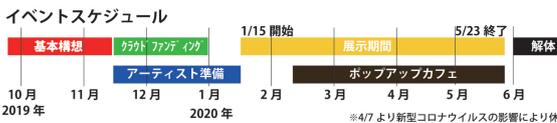
### (4) 拡大された「近隣説明」による街の変化の周知



クレーム産業と呼ばれる建設業界において、それを避ける法的プロセスのひとつに「近隣説明」がある。近隣住民との事後の紛争を無くす目的だが、建設サイドはクレームを恐れ、情報公開を最小化する傾向があり、新しく建築をつくるプロセスにおいて地域のコミュニティを活性化するためには足かせになっている。NYハイラインの事例のような、完成を待ち望んでもらえるような建築をつくる為、知ってもらうことこそが必要だと考えた。

そこで本件では完成模型を解体現場に設置、新聞やテレビに対して計画段階から広く情報公開し、イベントを通じて多くの人に関わってもらった。地域の方々はもちろん、多くの方々に新しい建築と街を認知してもらうことで、「近隣」を大きく超えた「説明」ができたと考えている。

## 2. プロジェクトにおける具体的な業務内容



- ①企画の立案
- ②チームのオーガナイズ、ワークショップ
- ③会場構成・スケジュール管理
- ④クラウドファンディングによる資金調達
- ⑤イベント管理体制の構築
- ⑥WEBページ制作
- ⑦メディアによる積極的な情報発信
- ⑧イベント運営



## 3. イベントの実例

8F	きもの屋の着付け室を再編成したラウンジスペース	残置物によるライブラリー	空間を生かした立体的なアート展示
7F	アートフロア	街から立ち寄りやすいカフェ、Tシャツショップ	写真館の歴史を伝える企画イベント
6F		写真館	参加型のキッズアートワークショップ
5F	上映室	将来の計画を模型やイメージパースにて公開	写真館スタジオを利用した、映画上映会やアート展示
4F	ラウンジ	現場で描かれ、更新されていくクラフティ	現場で描かれ、更新されていくクラフティ
3F	カフェ		
2F	Tシャツショップ		
1F	展示・イベント		
B1			

解体予定建物を原状回復の呪縛から解放された空間と読み替え、都市における私的領域と公的領域の境界線を組みほどく意欲的な試み。解体までの短い未利用の時間が空間化され、建築士が関与する領域が大きく引き伸ばされた。建物の終末のマネジメントを職能として確立できれば、そこでできる人的交流をもとに、新築時の設計を依頼されるチャンスも増えるだろうと

想像が膨らむ。東京から不安定な空隙=テラン・ヴァーグが消えつつあるように感じていたが、こういった活動の継続によって都市に潜在する空地が可視化されることに期待したい。

吉村 靖孝

### ■アトリエ・組織設計という枠組みからの脱却

ポスト・コロナ時代において、新築という手段はより選択されにくく、既存ストックを活用していく傾向に拍車がかかることが予想される。しかし、建替えを前提とした現在の新築ありきの法体系、**検査済証取得率 20%**といった既存建物の状況は、法規や構造の制約が絡み、活用のハードルが非常に高いものになっている。それらの建物を活用するには知識と経験が必要となっている。

再生建築研究所が個人事務所と大きく異なる点は、**再生建築のコンサルティング**を行う別人格を社内につくったことにある。

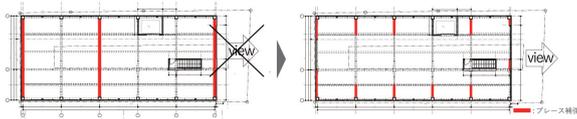
このことで、設計チームは意匠デザインに注力しながら、事業として物件の再生を着実に進めていくことが可能になり、さらにコンサルティング業務や、他の設計事務所との共同が増え、より多くの物件の再生につながっている。また、東京大学川添研究室の特任研究員として、歴史的な総合図書館の再生を実現に導いた実績もあり、再生建築の知見を学術に結び付けたいと考えている。

### ■0から1をつくり出す

再生建築ではリノベーションの考え方は異なり、新築と同じように前提条件をデザインすることが可能である。再生建築研究所では、通常的设计業務に加えて、「**建築の不可能を可能に**」をテーマに、**0から1を生み出す**ことで設計の可能性を大きく広げている。

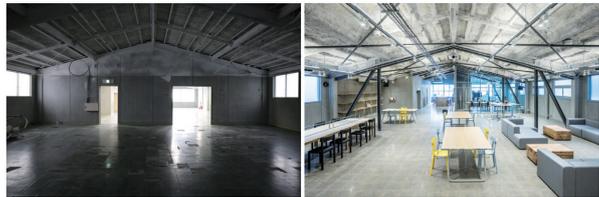
100BANCH（東京都渋谷区）は東急株式会社から依頼を受けた物件で、事務所倉庫として使われていた建物を、カフェとクリエイティブオフィスとして再生した。過去に耐震診断を行っていたが、効率は良いものの使いづらい補強計画となっており、リーシングが難航していた。そこで、再生建築研究所で耐震診断、補強設計を見直し、繊細な補強を数を増やして分散させる計画とした。

さらに、排煙も同時にとれる計画とすることで、既存の倉庫らしい空間をのこしたオフィスとすることができた。それによって、現在は大手企業のイノベーションセンターとして機能している。



効率が良いが使いづらい補強計画となっており、唯一開放されている道路側の開口部も補強で塞がれる形であった。

小さな補強を分散配置することで自由度の高い空間となる。補強の添え梁は防煙垂壁の役割も果たしている。



100BANCH（東京都渋谷区）内装設計：スキーマ建築計画

### ■再生によって生まれる建築

再生建築という手法は、新築と同じような自由度の高い設計が可能であり、さらに既存躯体がある状態から設計するため、時には**新築では実現しないような建築**をつくることもできる。そのような、再生だからできる建築をつくっていくことで、再生の可能性を広めていきたい。

神南1丁目ビル再生計画（東京都渋谷区）は、築40年の飲食テナントビルをオフィスとして再生する計画である。東急株式会社が所有するこのビルは**開口のほとんどない建物**で、ルーバーの設置など幾度も改修が繰り返されていた。

無開口の飲食店から環境として採光を必要とする事務所への用途変更の際に、外壁を解体して新設の開口を設ける。外壁躯体ラインの内側にサッシュを取り付けるインセットサッシュのディテールを考案し、**その外壁解体の作法を「はつりのディテール」としてファサードデザインに反映させた**。

既存建物の増改築履歴の是正と、開口新設時の外壁の研りによって生み出される施工誤差から生まれるゆらぎを使って、既存の躯体の履歴と与件（用途変更、耐震、断熱）の変遷をそのまま外壁に発露させた再生建築ならではの空間としている。

### ■さらなる革新を目指して

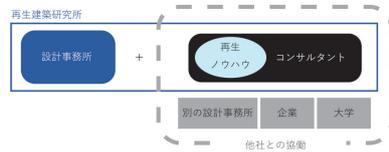
建築=新築として都市を更新し続ける時代は終わりを迎えつつある。オリンピック開催によりまだしばらく新築ムードが続くようにも思われたが、COVID-19により状況は以前にも増して変わってくるだろう。

再生建築研究所では、より積極的に既存ストックの再生を進めるため、組織の更なる体系化、そして新規分野への事業拡大を構想している。これまでの、アトリエ事務所・組織設計という枠組みから脱却した新しい形の設計事務所として、ポストコロナ時代における建築の未来を切り開いていきたい。

個人事務所時代のモデル



再生建築研究所のモデル



### 建築の不可能を可能に

一般的な設計事務所のワークフロー	再生建築研究所のワークフロー
STEP 0	<b>調査 RESEARCH</b> ① 土地・建物の存在確認 ② 用途・構造の把握 ③ 法規性の確認 ④ 都市再生に関する研究 ⑤ 調査・調査の把握 ⑥ 調査方針について多様な存在価値を探ります。
STEP 1	<b>企画 PLANNING</b> ① 土地・建物の価値向上 ② 新築・再生計画の提案 ③ 使い方の提案 ④ コラボレーション ⑤ 新築と再生の比較など、土地・建物の価値を向上させる様々な可能性を提案します。
STEP 2	<b>設計 DESIGN</b> ① 建物の保存・活用 ② 法規性を活かした設計 ③ 計画に適合した耐震補強 ④ 「履歴」の設計 ⑤ 古い建物の活用、法規制、耐震補強など様々な課題を解決しながら、豊かな空間を創ります。
STEP 3	<b>運営 MANAGEMENT</b> ① 管理・運営のサポート ② 建物のマネジメント ③ 建物のメンテナンス ④ 企画・運営、イベントの企画など積極的に長く関わり続けます。



FabCafe Hida（岐阜県飛騨市）



ミナガワビレッジ（東京都渋谷区）



神南1丁目ビル再生計画（東京都渋谷区）

建築基準法制定以前に建てられ、検査済証どころか、確認申請も行っていなかった木造建物を用途変更し、飲食店として再生した。この物件では**再生建築コンサルタント**として、過去の航空写真などの資料を集め、行政と協議をしながら既存不適格証明を行うことで確認申請を提出し、計画を実現することが出来た。（設計：東京藝術大学中山研究室 再生コンサル：再生建築研究所）

ミナガワビレッジは、表参道に建つ**検査済証のない木造建物を再生**した、4戸の長屋（事務所兼用住宅）とカフェ、フリースペース、庭からなる複合施設である。現行法への適合や断熱改修を行い、さらに**60年ぶりに検査済証を再取得し不動産価値の向上**にも寄与した。再生建築研究所も、**設計者でありながらテナントとして入居し、家守としてミナガワビレッジの運営管理**を行う。

神本 豊秋（かみもと とよあき）

株式会社再生建築研究所 代表取締役  
 神本豊秋建築設計事務所 主宰  
 東京大学 生産技術研究所 川添研究室 特任研究員  
 ミナガワビレッジ 運営



法規がまちをつくっている。

という違和感がある人も多いかもしれないが、道路斜線等の形態制限だけでなく、用途や床面積の増減等、建主の事業としての意思決定に大きく関わっているという意味でも、かなりの影響があると思う。

建築士は、法規を遵守しながらの設計は必須であるが、法規の解釈には幅がある場合が多く、場所によって結論に幅がでてくる、ということも多々あるのが現状だ。つまり、法規的ロジックをどうデザイン

するかによって、建築が変わってくるのだ。

特に既存ストックの利活用においては、その法規の解釈と対話のスキルは、プロジェクトの成立と伴に深く関わってくる。

神本氏の活動は、通常、法規的に無理だと思われるがちな事象に対して、真正面から向き合い問題を解決する。それは、アトリエ設計事務所が設備設計や構造設計と協業し設計をすすめていくように、これからの建築士に求められる重要な職能だと思う。

吉里 裕也